

動物飼育を通して学ばれるものは何か

—対話的自己の視点を手がかりにして—

有賀 功太郎 高度教職開発コース 教育課題探究プログラム

キーワード：動物飼育，対話的自己，もう一人の私，多声的自己

1. 研究の背景と目的

3年生まで山羊を飼育していたA児は、これまでの活動を振り返り「一番勉強になったのは、迷ったんだけど、話し合っ、トット（雄山羊）を去勢させたこと」と話した。A児のこの言葉から、山羊の飼育をめぐる自己の葛藤や他者との対話の場が、自身の学びにとって意味あるものとして自覚されていることが分かる。内田（2019）は、「成長するということは複雑になること」だとし、自己の多声性の重要性を指摘している。内田の言葉を借りれば、A児の言葉にある「迷い」とは、自己の内にある複雑さへの気づきであると考えられる。それは、動物と自己との関係の中だけで生じたものでなく、他者の声も重要な契機となって存在していたことも窺える。このような動物をめぐる自己と、他者との関係の中で、どのように自己の多声性が生じていくのかを見ることは、子どもが動物飼育を通して何を学ぶかを考えていく上で新たな視点となると捉えた。このことにかかわって、重要な視座を与えるのがハーマンス（2006）の対話的自己論である。溝上（2008）は、ハーマンスの対話的自己論の特徴について「自己の世界に存在する様々な私、他者、モノを『ポジション』として変換する点」、「変換されたポジションどうしの関係を『声』によってつなぐ点」の二点を挙げている。動物を飼育する中で発せられる子どもの内なる「声」に着目し、その声は私、他者、モノ（動物）というポジションの中でどのように発せられたのかを考察することで、様々な述べられてきた動物飼育を通じた学びについて、再考したいと考えた。本研究では、N小学校同学級2・3学年における動物飼育の実践を研究対象とした。

2. 動物飼育を通して学ばれるもの

2.1 私の中の「もう一人の私」

(1) 動物への親愛のおもいが生む「もう一人の私」

飼育していた山羊に発情の兆候が見られると、子どもたちは山羊を「お母さんにしてあげたい」と願っていった。山羊が安全に出産するための目標体重を45kgと子どもたちと定めた。毎週の体重測定の数値を次に訪れる発情日と重ねながら見つめる日々の中で、子どもたちは「次の発情までに目標体重に達するのか」という問いをもっていった。I児は、これまでの体重の推移を表すグラフを見つめ、「これに決まってるじゃん」と41kg、42kg、

42kg と今後の発情までの体重を予想した（図 1）。しかし、教師が交尾できるかどうか問うと「できる」と答えた。この時、I 児は、二つの矛盾する考えを持ち合わせていた。数の上から見れば目標に達しないとわかる I 児と、それでも交尾させたいと願う I 児である。つまり、I

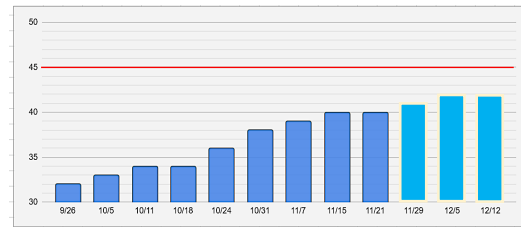


図 1 I 児が記した山羊の体重推移（水色）

児の中に「もう一人の私」が存在していたと考えられる。牛山（1989）は、動物飼育を通して「親愛のおもい」が深まることを指摘している。山羊とのかかわりの中で山羊への親愛のおもいを深めてきた I 児は、山羊が雄山羊を求める姿に出会い交尾をさせたいと願った。この願いによって規定の体重に満たなくても「できる」と交尾に踏み切ろうとする、矛盾する「もう一人の私」が生まれたと考えられる。その後、別の T 児が「45 キロに達するかどうかそんなことはわからない。未来はわからないのだから」と声を挙げると、I 児は、この発言に大きく反応し、共感的に受け止めた。この姿は、T 児の声を、I 児の内にある交尾させたいと願う「もう一人の私」の声として聴いたのではないかと考える。

(2) 動物のもつ二つの側面から生まれる「もう一人の私」

生まれてきた子山羊の一頭にだけ角が生え、除角するかが話題となっていた。以下は、話し合いを経て綴った K 児の記録である。

僕は迷った。（中略）もし電気ゴテで角をとると子山羊が痛がるし、もしとらなかつたら僕たちが痛いから。それで話し合っ、結局「切る」になった。僕はいいと思った。（中略）何日か経って先生が角を切るところの映像を見せてくれた。子山羊は「メェーメェー」って鳴いてかわいそうだった。僕は本当に良かったのかなと思った。

K 児をはじめ、多くの児童が角を「とる」か「とらない」か迷った。畔上（2024）は、動物への関わりにおいては、客観的合理性を前提とする認識論的アプローチと主観を含みこむ存在論的アプローチの二つがあると指摘している。今回の場合、認識論的アプローチとは、家畜としての対象、つまり「角をとった方が扱いやすい」という飼育における合理性である。一方、存在論的アプローチとは、動物とのかかわりの中で生まれた思い、つまり「山羊のシロが痛がるから角をとらない」という、合理では割り切れない唯一無二の対象としての見方である。この二つの見方は、先にふれた「もう一人の私」の存在として位置付けられる。子どもたちは、二つの側面から角を見つめ、どちらも頷ける部分があり、その間で揺れ動いたのである。さらに、話し合いを進めるうちに獣医から紹介され最終的に「切る」ことに決まっていた。この選択について、K 児は、「いいと思った」とした。恐らく「とる」と「とらない」いずれかを選択してもそれぞれの判断を是として受け取ることができただろう。しかし、角を切られる子山羊の映像から「本当に良かったのかな」と揺らぐ思いを綴っている。ここには、動物のもつ二つの側面を背景とした「私」の考えには、決して正解はなく、選択してもなお、完結しない問いを抱かせることが伺える。その問い続ける自己が K 児にとっての学びとみることができると考える。

2.2 動物の中の「もう一人の私」

山羊に餌を与える際、Y 児は「もぐもぐもぐ、おいしい」と呟いた。まるで山羊になったかのような声である。牛山（2001）は、動物の飼育について「遊びの層」があるとしている。それは、「（動物）で遊ぶ」、「（動物）と遊ぶ」、「（動物）になる」と表され、自分本位から対象に寄り添う姿へと移り変わるのだという。「もぐもぐもぐ」と山羊の言葉を思わず代弁する姿は、まさに「山羊になる」姿であり、動物の中に「もう一人の私」を見る姿である。そのような姿は、山羊の出産の際にも現れた。その時の感想を H 児は、「母山羊は産まれるときに、赤ちゃんが出たり引っ込んだりして大変だったから、一頭目が産まれた時、感動して涙が溢れました」と記し、R 児は、「二頭目が産まれる時、袋の中に入ったまま生まれてきて『息できないよね。死んじゃう』ってドキドキして泣きそうになった。子山羊が（中略）やっと立った姿に感動した。自分が小さい時、立ちたかったけど立てなかったと考えたら、僕も子山羊と同じくらいがんばっていたのかなと思った」と記した。これらの感想には、母山羊の痛みに耐える姿や子山羊が懸命に生きようとする姿に自らを重ねる言葉が綴られている。このように、動物の中に「もう一人の私」が生まれるとき、そこには動物のむき出しの生に引き込まれるようにして生まれる感動がある。

2.3 他者の中の「もう一人の私」

以下は、ある日の山羊の世話の際、小屋掃除をする二人の児童と教師との会話である。

教師：掃除を二人でやっているけどいいの。

H 児：いいんだよ。ミロ（山羊）ともっと仲良くなりたいからお散歩しているんだよ。

K 児：そうそう、仲良くなれていない人には、なれさせた方がいいよ。

H 児：あと、ご飯作っている人は、美味しく食べてほしいって、私たちは、掃除してきれいにしたいって、ほら、みんな思いがあるんだよ。

K 児：「お掃除やって」とかじゃなくてみんなもやりたいことがあるからやらせてあげて。

教師の声を掛けに、H 児は、「いいんだよ」とし、散歩をする人はもっと仲良くなりたい、ご飯作りをする人は美味しく食べてほしい、私たち掃除をする人はきれいにしたいというそれぞれの思いがあることを示した。この言葉は、かかわり方は違うが、「山羊のため」という思いは同じであるとの意図として受け取れる。しかし、H 児が語るこれらの「思い」は、直接的な他者との会話によって確認されてはいない。畔上（2022）は、「自らの世界と動物が生きる世界との往還の中で、子どもは材や自身との対話を深める」ことを指摘し、「この聞こえない対話によって、友との会話は言葉のやり取りを超えて汲み取られ世界が共有される」ことを言及している。H 児は、具体的な言葉のやり取り（現象対話）はなくとも、共に動物と暮らす他者だからこそ相互に「思い」を汲み取ることができたと考えられる。つまり、この姿は、他者の中に「もう一人の私」を見る姿と言える。

3. 動物飼育を通した教師の学び

先の 2.3 において示した会話記録で、当初教師は、掃除する子どもが少ないことに問題意

識を抱えていた。子どもが責任をもって飼育してほしいと考えたからである。しかし、H 児や K 児の言葉によって思いとどまる。それは、行動は違うが、それぞれが山羊のために懸命に活動していることを気づかされたためだった。このことは、飼育における「責任」の捉え直しであり、「こうあるべき」という枠づけられた考えからの脱却とも言える。つまり、子どもによって、教師自身が新たな「私」に出会っていった姿と捉えることができる。また、2.1(2)で示した角を巡る話し合いにおいて、子どもから「先生はどうなの」と教師の考えを求められる場面があった。教師は、悩んでいること、そして、教師という立場からすると子どもへの安全配慮の面から「とる」ことが望ましいことを伝えたが、それによって議論が発展することはなかった。ここには、動物の飼育をめぐる教師自身の中にも「もう一人の私」の存在を伺うことができる。教師としての立場、そして子どもと同じく山羊とのかかわりから発生した山羊を思う立場である。教師自身の揺れ動きは、解を握る絶対的な存在としての教師ではなく、共に飼育する者からの一提案として認識され、教師の考えに誘導的に進展されることはなかったからだと考える。このことは、飼育という正解のない問いの前で、教師もまた子どもと対等な一探究者であることの重要性を示している。

4. 結論

本研究では、動物飼育を通して子どもが様々な「もう一人の私」と出会うことが見えてきた。それは動物への認識論的アプローチと存在論的アプローチという二つの側面の重層的往還の中に生まれる「もう一人の私」である。子どもは、動物を共に飼育する友（他者）の言葉や行動の背景にある意味を汲み取り、友の中に「もう一人の私」を見出し、動物の中にも「もう一人の私」を感じながら親愛の思いを深めていった。また、子どものみならず教師も、飼育をめぐる様々な問題に直面する中で、揺れ動く「もう一人の私」を感じながら、「こうあるべき」という自身の枠づけられた考えは、動物に真摯に向き合い育てようとする子どもの声や姿によって更新されていった。このように動物飼育は、命と共に在るその必然性と他者と共有しながらも正解のない事態の中で、子どもも教師も「もう一人の私」と出会う契機となり、それぞれの内に多声的自己が形成される。これが学びの一つの視点として示唆される。

文 献

- 内田樹（2019）. ブログ「内田樹研究室」http://blog.tatsuru.com/2019/09/02_1348.html
- ハーマンスら（2006）. 溝上慎一ら訳. 対話的自己. 新曜社
- 溝上慎一（2008）. 自己形成の心理学 他者の森をかけ抜けて自己になる. 世界思想社
- 牛山榮世（1998）. 実践者・淀川茂重の問いかけるもの. 信濃教育第 1223 号. 信教出版
- 牛山榮世（2001）. 学びのゆくえ 授業を拓く試みから. 岩波書店
- 畔上一康（2024）. 人間的営みとしての「総合」の学び. 伊那小学校研究紀要
- 畔上一康（2022）. バフチンの対話論に基づく問題解決学習の再考. 考える子ども 412 号